都市河川を対象に活動している市民団体の調査研究

―「渋谷川ルネッサンス」と「善福寺川を里川にカエル会」を対象として―

1X13D073-0 平間　紗希※

Saki Hirama

東京都には河川を対象に活動している多くの市民団体が存在しており、生態や水質の調査、清掃活動など様々な活動が各地で行われている。本研究ではその概要を整理したうえで、特徴ある活動が見られる「渋谷川ルネッサンス」と「善福寺川を里川にカエル会」について、活動経緯および活動内容をヒアリング調査によって把握した。その結果、団体の活動は対象とする河川および周辺環境が影響していること、また活動主体の意識に共通する傾向があることを明らかにした。

Keywords：*東京都、善福寺川、渋谷川、市民団体、活動目的*

１．　研究の背景と目的

１．１ 研究の背景

東京都には、一級河川が 92 本と二級河川が 15 本の、合計 107 本の河川が流れており、暗渠化されたものも含めれば、その数は非常に多いと言える。

河川空間の利用に関しては、2010 年より、国が河川空間のオープン化を行ったことで、民間による河川敷地の使用が自由になった。それにより、東京都では、隅田川沿いにオープンテラスを設置した飲食店が民間により経営され始めた[1)]。しかしながら、まだ、東京都における川への関心は低いように思われる。島谷[2)]は水の都と思う都市に大阪の人は地元を選ぶのに対し、東京の人は選んでいないと述べている。1964 年、東京オリンピックで多くの河川が暗渠化または三面コンクリート張りの護岸にされ、川と人は遠ざかってしまった。暗渠化された河川として例に挙がる渋谷川は、神宮外苑において 2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けた新国立競技場の建設に関する報道番組[3)]で紹介され、広くその存在は知られるようになった。その影には、以前より、市民団体による活動があり、そのような河川を対象とした市民の草の根活動は、現在、都市河川を対象に行われている。

１．２ 研究の目的

本研究では、現在、東京都の河川を対象に活動している団体に関して、それぞれの団体の活動にどのようなきっかけ・背景があったのか、どのような目的でどういった活動が行われているのかを調査する。団体の活動に参加しているメンバーに焦点を当て、一人一人に対して、河川を対象に活動をしている目的や背景をアンケート及びヒアリング調査によって明らかにする。

１．３ 既存研究と本研究の位置づけ

都市河川について書かれた論文や、市民団体または NPO 法人を調査した論文は多数存在する。前者について、樋口ら[4)]は、福岡県の中心部を流れている都市河川を比較し、街を活性化できる都市河川整備のあり方を述べている。後者について、佐藤ら[5)]は、鶴見川地域を対象に活動している市民団体の地球環境保全の貢献度を、市民団体の活動と行政の保全策を比較・検討することで明らかにし、次いで流域に関わる団体同士の関係性、組織的特徴を明らかにすることで、環境保全における市民団体の今後の展望の考察をしている。

上記の研究では、川辺の整備と街づくりの関係性や、個々の団体の組織形態・他団体との連携を明らかにしている。本研究は、河川を対象に活動している団体の対象河川を東京都の河川と定めた点、また、実際に団体へヒアリングやアンケートを行い、なぜ川を対象に人々は活動を続けるのか、河川活動を通して人々は何を求めているのか、その想いを明らかにした点が、他の研究とは異なると言える。

１．４ 研究の流れ

まず、東京都を流れる河川を対象に活動している団体を把握するために、公益財団法人日本河川協会が提示しているデータベースを用い、設立年順に一覧表としてまとめた。その後、複数の河川団体への活動参加・団体訪問・ヒアリング・アンケートを行った。本研究では、活動参加者に多様性が見られた 2 団体へ、川を対象に活動をする人たちの活動目的や背景の把握を行うため、ワークショップ形式(以降、WS)で団体の活動概要を明らかにしたのち、メンバー一人一人へヒアリングを行った。

※　早稲田大学創造理工学部社会環境工学科　景観・デザイン研究室　学部４年

2.　東京都の河川を対象に活動している団体

2．1 河川協会のデータに基づく調査

東京都を流れる河川を対象に活動している団体を把握するため、公益財団法人日本河川協会[6](以下、日本河川協会)のデータを用いた。日本河川協会は、河川の再生や水循環の健全化など、川や水をテーマに活動する団体に相互の情報交換、川づくり、まちづくりへの市民参加の促進に役立てることを目的として、川や水の団体調査を行っている。2016 年(平成 28 年)5 月 31 日現在の登録団体数は 3520 団体で、そのうち東京都を拠点に水と川をテーマに活動している団体は 176 団体である。登録には幾つかの項目への回答を要し、団体代表者の任意の回答を経て[7]、登録完了となる。

日本河川協会は、水に関連した活動をしている団体を調査対象としているため、必ずしも登録されている全ての団体の活動対象が河川とは限らない。本研究では、東京都を活動拠点とし、かつ東京都を流れている河川を対象に活動している団体として 166 団体が抽出できた。

2．2 団体の傾向

抽出した 166 団体で法人格を所持している団体は、44 団体であった。さらに、設立年と団体数および法人格の有無を図 2.1 に、団体が活動の対象とする河川とその河川に関わる団体数を図 2.2 に示した。図 2.1 より、1980 年前後に多くの河川団体が設立されたことがわかる。また、法人格を所持している団体数は、おおむね 2000 年を境に増加したことがわかる。この時期に市民団体の設立が目立ち、かつ、法人格を有した団体が増加した主な要因は、1995 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災を経て、この年は「ボランティア革命」や「ボランティア元年」などと呼ばれることがあるように、ボランティアが広い分野で活躍したこと、また、1996 年に特定非営利活動促進法(通称 NPO 法)が施行されたことが考えられる。

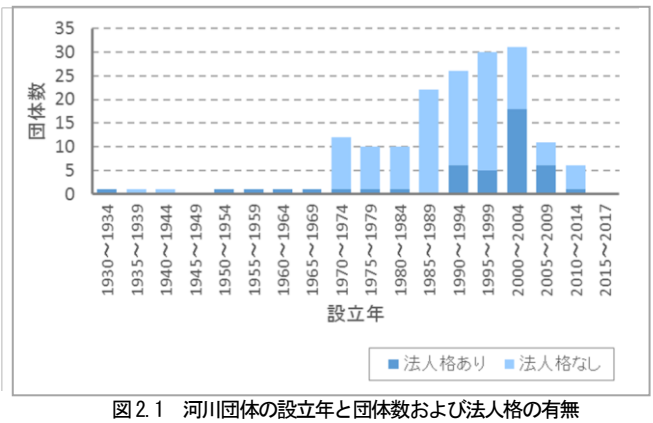

図 2.1　河川団体の設立年と団体数および法人格の有無

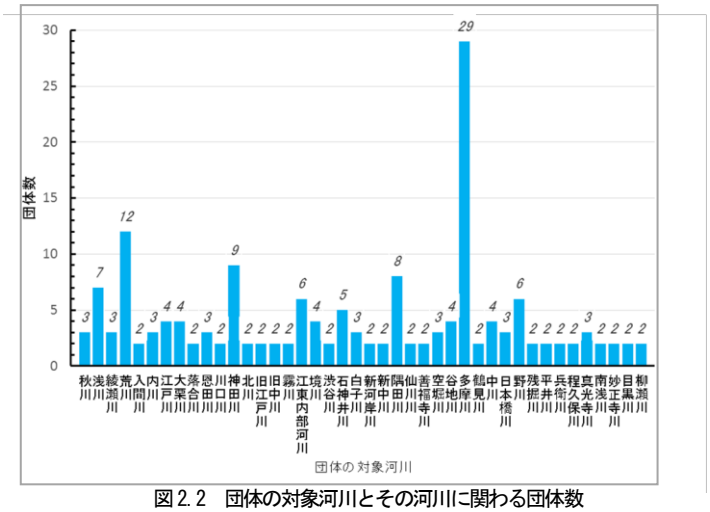

図 2.2　団体の対象河川とその河川に関わる団体数

2．3 インターネットによる活動団体の調査

2.1で抽出した団体以外に、インターネットによる「NPO法人 東京　河川」「市民団体　東京　河川」というワード検索から抽出した団体を表2.1に示した。団体代表者へヒアリング調査を行い、団体の活動内容及び活動に定期的に参加するメンバーの有無とその属性を明らかにした。その後、活動内容の充実という点から、「善福寺川を里川にカエル会」と「渋谷川ルネッサンス」の2団体をさらに詳しく調査することとした。

表 2.1　団体代表者へヒアリングを実施した団体の概要

	善福寺川を里川にカエル会	渋谷川ルネッサンス	隅田川ルネサンス	水都東京を創る会	江東区水辺に親しむ会	日本橋川・神田川に清流をよみがえらせる会
設立年	2012年	2002年	2011年	2010年	2002年	2008年
対象河川	善福寺川	渋谷川	隅田川	日本橋川、隅田川	江東内部河川	日本橋川、神田川
活動人数	20名弱	15名強	34名弱	35名弱	10名強	100名弱
活動目的	市民力で善福寺川を里川に変えること	渋谷川を太陽の下を流れる川として再生・復活させる事業及びそれに関連する事業を行い、広く世界の人々に対して水と川の重要性の認識を高め、今後の川に関する諸活動を行うこと	全国の人々が憧れ、江戸の華であった隅田川の賑わいを、現代に生まれ変わらせ、新たな水と緑の都市文化を未来に繋ぐこと	川の水質を綺麗にすること、および、川から街を見てもらうこと	川やまちについて、知ることと体験することの両輪	EM技術を用いて、日本橋川の水質浄化をすること
活動内容	井荻小学校の生徒と共に行う川の生き物調査と清掃、また、善福寺川の整備事業に対する提案を行う。	護岸緑化事業を行い、また、打ち水活動を普及させた。2013年から渋谷川沿いのウォーキングを定期的に実施し、毎年春に「春の小川パレード」を開催する。新国立競技場の環境問題に関する提言書作成にも関わる。	隅田川沿いにおいて、マルシェの開催やカフェの設置、舟運等の社会実験を複数行い、隅田川の賑わいを創出するよう取り組みを行っている。	1回/月の舟運ツアーが主な活動である。舟運ツアー後、日本橋商店街の案内を行うこともある。2013年からは中央区観光協会と協力して、舟運ガイド育成のための講座を開設してあり、その差に用いる教材の監修を担当している。	川に関する知識共有の場としての「水彩サロン」と、体験する場として「水彩フェスティバル」を行い、知ることと体験することの両輪を図る。船に乗ってお花見を楽しむ「お江戸深川さくらまつり」の開催や、2016年から、水辺を楽しむ「リバーフェスタ江東」を開催する。	EM活性液のプラント設置し、EM活性液を10トン/週1放流を行う。加えてEM団子の投入を行う。E頻度は2回/年で、適宜追加投入を行う。

３．　渋谷川ルネッサンス

３．１　調査方法

１）調査方法

「渋谷川ルネッサンス」の代表の方々に聞き取りを行い、団体設立の背景と活動概要の把握を行った。その後、メンバー6名にアンケートを行い、WS形式で設立から現在までの活動を振り返ってもらった。また、個別にそもそも川の活動をする目的の聞き取りも行った。表3.1と表3.2にヒアリング概要を示す。

表3.1　代表へのヒアリング概要

日時	2016年10年6日／2016年10月24日／2016年12月22日
目的	団体設立の背景及び活動概要の把握
対象者	石井氏(代表代理)／尾田氏(代表)／池田氏(元副代表)
方法	設立から現在までの活動年表を用いて約1.5時間聞き取りを行った。

表3.2　メンバーへのヒアリング概要

日時	2017年1月6日			
目的	団体の活動概要・参加者の参加時期・参加目的・そもそも川活動をする目的の把握の把握			
対象者	6名	石井氏(代表代理)	S氏	U氏
		K氏	I氏	Km氏
方法	各自アンケートへの回答の後、約1時間WSを行った			

２）団体の活動対象とする河川の概要[8)]

渋谷区内の宮益橋から天現寺橋間の2.6kmが渋谷川、港区内の天現寺橋から河口間の4.4kmが古川と呼ばれており、渋谷川・古川あわせて、河川延長は7.0kmの二級河川である。本川（宮益橋）の上流域と支川は、すべて暗渠構造で下水道化されており、本川の稲荷橋の下流から開水路となり、JR浜松町付近で東京湾に注いでいる。かつて、渋谷川には、宇田川などの支流がいくつもあり、宇田川の支流の一つであった河骨川は、唱歌『春の小川』の舞台と言われている。現在、渋谷駅東口の地下では、暗渠となった渋谷川の移設工事が行われている。

３）団体の活動経緯

①設立段階

「渋谷川ルネッサンス」は、元建設省河川局長の尾田栄章氏と当時博報堂の社員であった池田正昭氏の 2 名によって設立された。尾田氏は、退官後移り住んだ渋谷の自宅前の道が渋谷川の支流の一つであったことと、「都市で春の小川再生をやらなければいけない」という考えを以前より抱いていたため、渋谷川の蓋を取り外す活動を始めた。

池田氏は、当時、編集長を務めていた博報堂創刊の future social design を掲げた雑誌『広告』の地域通貨を雑誌で取り上げることとなった。池田氏は地域通貨をアースデーマネーとし、環境関連の企画としたが、博報堂の社員として事業展開しなければならなかったため、尾田氏にアースデーマネーと春の小川再生の構想案と共に NPO 法人の設立を依頼した。具体的で実現可能性の高い案が持ち出された尾田氏は賛同し、NPO 法人渋谷川ルネッサンスは設立された。

②活動期(2002 年から 2012 年)

この期間の「渋谷川ルネッサンス」の主な活動は、渋谷川護岸緑化プロジェクト(2003 年)、大江戸打ち水大作戦(2003 年)、世界都市河川フォーラム(計 3 回開催：2004 年、2005 年、2009 年)の 3 活動である。

2003 年の渋谷川護岸緑化プロジェクトは、三面コンクリート張りの護岸に、溶岩パネルを張り付ける取り組みである。溶岩パネルの資金は、先述したアースデーマネーの支援で賄った。

2003 年に実施された大江戸打ち水大作戦[9)]は、国土交通省の研究機関である土木研究所が試算した、「東京都区内で散水可能とされる 280 平方キロメートルに、1 平方あたり 1 リットルの水を散水すれば気温を 2℃下げることができる」という研究データを実証するための社会実験として行われた。尾田氏の後輩で当時国土交通省河川環境課の 0 氏が、尾田氏に実証実験の協力を依頼した。大江戸打ち水大作戦は、東京都全体に呼びかけ、2003 年 8 月 25 日の正午から午後 1 時までの 1 時間、都内各地でおよ

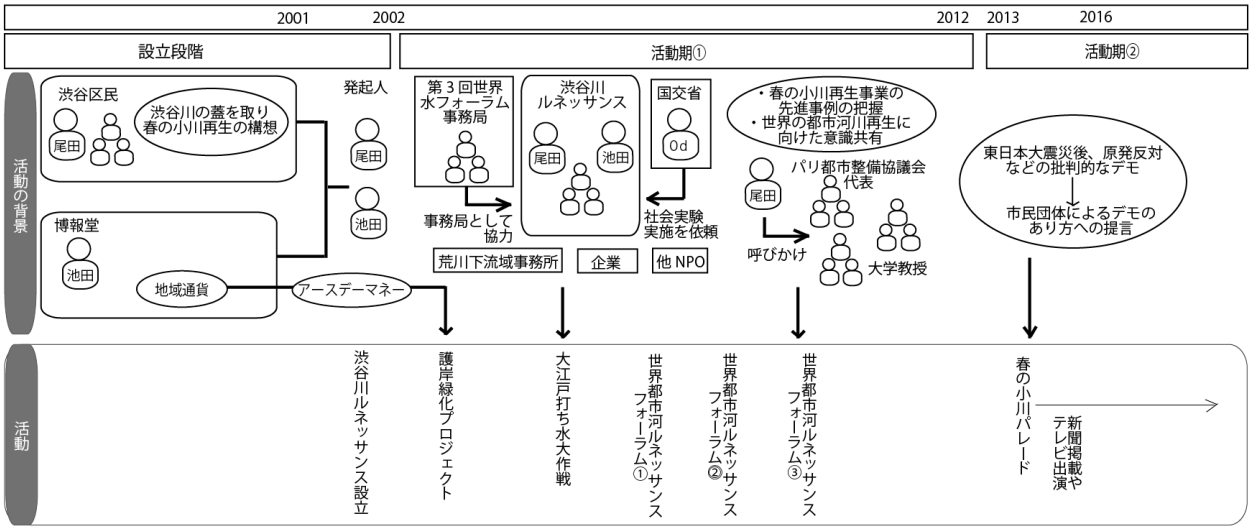

図 3.1　渋谷川ルネッサンスの活動概要（図内、敬称略）

そ 30 万人以上の都民が一斉に打ち水を行う一大イベントとなった。この活動は、尾田氏が事務局長を務めた NPO 法人第 3 回世界水フォーラム事務局の協力を経て本部を設け、複数の参加団体を得て活動実施に至った。その他の参加団体では、アースデーマネー・アソシエーション、ピースフルエナジー、ヘブンデイズといった NPO 法人と、荒川下流河川事務所の行政側からの参加、加えて、複数企業の参加があった。この活動の特徴は、都民 30 万人以上の参加者を得られた点である。

2004 年、2005 年、2009 年と計 3 回実施された世界都市河川フォーラムは、都市での春の小川再生の取り組み事例を把握し、渋谷川の再生の先進事例にすること、及び、世界中で都市河川再生の意義や高架を認識しあうことうを目的に、渋谷川ルネッサンス主催で開催された。

③震災以降の活動(2013 年から 2015 年)

2013 年から開始された春の小川パレードは、2011 年の東日本大震災がきっかけとなって行われた。原発反対運動といった物事への反対や批判の内容を含んだデモ活動を大勢の人で行う動きが多く見られたころである。「渋谷川ルネッサンス」は、市民活動とはネガティブな活動ではなく楽しいことを打ち出してゆくものであり、一人であっても世の中に訴えたいことを言葉にする活動であるという考えのもと、春の小川パレードを開催した。これ以降の活動では、新聞掲載やテレビ出演が目立つ。このことに関して、メンバーは、市民活動はタイミングが全てであり、情報発信を怠らないようにしていると述べている。

3）個人の活動への想い

アンケートより得られた個々のメンバーの活動の背景及び目的を表 3.3 に示す。

表 3.3　「渋谷川ルネッサンス」メンバー個人の活動・川への想い

1	・人間の活動してきた結果が汚濁水として川の中に出てくるわけだから、川は人間活動が目に見えてわかるものだと思う。 ・もう一度東京を考える・自分たちの生活を考えるために川の蓋を外すことは大事。 ・受け身の中で楽しそうなものを楽しむ時代は、やりつくしたと思う。これからは自分から働きかけて変化させる社会になってきたので ・いまバーチャルの世界になっている。危険性を認識できないというのが恐ろしい、川は危険を教えてくれる。	尾田氏
2	・自然と共生する生活が日本人の伝統であり当たり前の環境を取り戻すことを考えている。 ・防災の観点から見ても、都心に川があるというのは利点が多い。	石井氏
3	・面白そうだからやった。人間は面白くないと動かない。 ・社会を変えたいという思いがあって行っていた。川が直接の対象ではなく、その先に見出したいことがあった。	池田氏
4	・子供時代、自宅の近くで遊んだ記憶があるので、東京の子供達にも同じような体験をさせたいと思っている。 ・目前の具体的な川で活動しつつ、日本のあり方を考えている。	S氏
5	・そもそもNPO法人とは？と興味があった。	U氏
6	・まちづくりに参加したいという思いで行っている。	I氏
7	・川があれば歌碑(唱歌『春の小川』)を見に来る人ができて、昔のお寺の境内のように賑わい、子供も自分の故郷がどうであったかというときに思い出せる風景があればいいと思う。	K氏
8	・渋谷に春の小川を再現させたい。	Km氏

4.　善福寺川を里川にカエル会

1）調査方法

「善福寺川を里川にカエル会」(以降、メンバーが通称として用いる「善福蛙」)には、その活動概要を把握するために定例会に参加し、代表の方々に聞き取りを行った。次に、設立から現在までの活動年表を用いて、「善福蛙」のメンバーのうち代表者を含む6名でWSを行い、これまでの活動を振り返った。その後、WS参加者全員およびその他のメンバーに、そもそも川の活動を行う背景・目的の聞き取りを行った。表.4.1、表4.2にヒアリング概要を示す。

表 4.1　定例会参加の際のヒアリング概要

日時	2016年7月～11月(定例会の参加時)			
目的	団体の活動概要・参加者の属性把握			
対象者	6名	島谷氏(会長)	三田氏(共同代表)	渡辺氏(事務局長)
		中村氏(共同代表)	滝澤氏(事務局長)	岩淵氏事務局)
方法	定例会に参加し、団体の活動概要の把握を行った。			

表 4.2　WS の際のヒアリング概要

日時	2016年12月23日			
目的	団体の活動概要・参加者の参加時期・参加目的・そもそも川活動をする目的の把握の把握			
対象者	6名	三田氏(共同代表)	渡辺氏(事務局長)	滝澤氏(事務局長)
		岩淵氏(事務局)	加藤氏氏(事務局)	N氏
方法	WSを行った後、約1.5時間参加者へインタビューをした			
日時	2016年12月23日			
目的	参加目的・そもそも川活動をする目的の把握の把握			
対象者	5名	中村氏(共同代表)	吉村氏(理事)	境原氏(事務局)
		賀川氏(事務局)	H氏	
方法	約10分間メンバーへインタビューをした			

2）団体の活動対象とする河川の概要[10]

「善福蛙」の活動対象河川である善福寺川は、神田川水系の河川で、全長約10.5kmを有する一級河川である。杉並区内西端にある善福寺池(上池・下池)に源流をもち、杉並区のほぼ中央をゆるやかに蛇行しながら流れ、東端の中野区の区境で神田川に合流する。河川全長の大よそ半分の区間は公園の中あるいは外縁に沿って流れ、主な公園として、都立善福寺公園、都立善福寺川緑地と和田堀公園があげられる。善福寺川の問題点は、集中豪雨時の氾濫と流式下水道による河川への下水の流出の2点である。集中豪雨時の氾濫では、杉並区を流れる善福寺川と妙正川という杉並区から中野区を流れる河川が、2005年(平成17年)9月4日に発生した集中豪雨で2度にわたり氾濫し、約3000軒が浸水した。

図 4.1　善福寺川周辺の概略図[11]

２）団体の活動経緯

①設立の背景と善福寺川に関する情報収集期間

「善福蛙」設立の発起人は、ミツカン水の文化センターで当時編集長を務めていた賀川一枝氏(以下、賀川氏)と、九州大学大学院の島谷幸宏教授教授(以下、島谷氏)の２名である。

当時、賀川氏は、ミツカン水の文化センターの機関紙にて、里川をテーマに特集を組んでいた。その賀川氏に、東京で里川が取り組める対象河川として善福寺川を提案したのが島谷氏である。島谷氏は、ミツカン水の文化センターでアドバイザーを務めていた。

その後、彼らは東京工業大学の桑子研究室を訪れ、市民力による善福寺川の自然再生の提案及び協力を求めた。東工大を拠点に活動を行うことが多かった。

2011 年下旬から 2012 年上旬の期間は、「善福蛙」を発足させるための善福寺川周辺にまつわる情報収集期間としていたため、この時期の「善福蛙」の主な活動内容は、他の団体が集うシンポジウムや杉並区が主催する会への参加であった。区が主催する「杉並区まちづくり博覧会」にて、「善福蛙」の活動協力と参加を呼び掛け、「神田川上流懇談会」の傍聴は、都の河川管理の状況把握を目的に参加した。「善福寺蛙」は、以前から善福寺川を対象に活動していた多くの既存団体から、新参者として受け入れてもらえるよう努めたという。

2012 月 3 月下旬から 2013 年 4 月上旬は、活動の中心をどこにおくべきかに関して議論がされた。「善福蛙」は桑子氏や島谷氏といった河川の専門家を交えた河川研究的な活動に偏りがちで、市民力をうたっているが活動メンバーに区民がいない点から、地域の人と接点を持つことに力を入れるべきであるという考えを強く抱いていた。

また、この頃、2009 年から善福寺川を対象にした川学習を授業カリキュラムとして取り組んでいる井荻小学校(以後、井荻小)と関わりを持ち始めた。

③会存続の危機と組織形態の変化

2014 年ごろ、これまで活動の中心を担っていたメンバーの活動参加頻度の低下、また、会の発足人であり諸活動で先頭を切っていた島谷氏と活動拠点でもあった東工大の桑子氏が活動に参加できなくなったことで、「善福蛙」は存続が危うくなった。これを機に、二人代表制・二人事務局長制に組織変更をした。

一方で、この危機は、「善福蛙」のメンバーの活動意識と、活動内容に変化をもたらした。これまで研究に近い活動内容であったが、メンバー間に、「自分たちで善福蛙を創っていかなければ」という感情が生まれ、区民による、区民と善福寺川に近い実践的な活動に変わった。

④実践期

2015 年以降、「善福蛙」の活動は、夢水路(都立善福寺公園の上池と下池を結ぶ水路)の活動が主となった。2014 年の秋、井荻小の生徒が杉並区長に夢水路の改修工事を進言し、区の公共事業となった。区主催の 4 度の WS と並行して「善福蛙」は源流の集いを実施し、子供の意見を反映させながら積極的に事業に関わった。夢水路の活動が落ち着きはじめた 2016 年頃から、国立研究開発法人科学技術振興機構(略称 JST)の活動資金を獲得した島谷氏が「善福蛙」の活動に復帰し、流域での考え方・雨水の利活用が活動の軸となった。

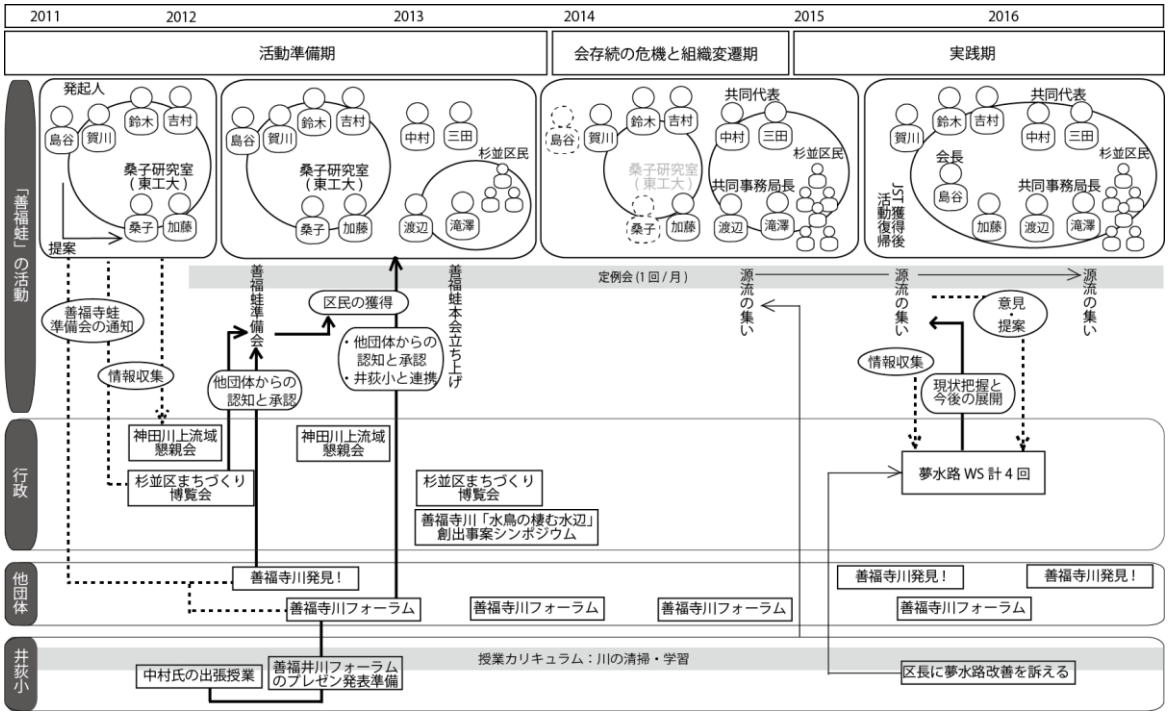

図 4.2　善福寺川を里川にカエル会の設立から現在に至るまでの活動経緯(図内、敬称略)

３）個人の活動への想い

メンバーから聞き出した活動の背景及び目的を表4.2に示す。

表4.2　「善福寺川を里川にカエル会」メンバー個人の活動・川への想い

1	・もともとは地球環境への問題意識があった。 ・みんなと繋がりを持ちながら物事ができる。	三田氏
2	・子供の頃から遊んでいる地元の川が善福寺川だった。善福寺川と、その横にある和田掘池というころで毎日水の中に入ったり釣りをしたり魚を取ったりして遊んでいた。30代半ばに、川を見に行ったところ見る影もなくなっていて、子供も遊んでなかった。	渡辺氏
3	・これからは自分たちの暮らしを豊かにしていく時代に入りつつあるし自分もそういう暮らしを送っていきたい。	滝澤氏
4	・子供たちを裏切らない大人として、言ったことは実行しようじゃないか。教科書だけの上っ面のものではなく、生きた勉強として、そして大人も口先ではなく真剣に子供たちと同じように大事なことは大事だ、やろうと思ったことはきちんとやろうとういう信頼性と人間性の構築を、裏切らない大人として最後までやり抜こうという思いで川の活動を行っている。 ・川が教育のフィールドになった。	岩淵氏
5	・私はもともと中野で街づくりの仕事をしていた。 ・善福蛙の活動を通して大きく変わったのは、前までは中野区といった行政の縦割りの関わりの中で街を考えていたが、流域全体で考えなければいけないといことを学んだこと。	加藤氏
6	・川ってゴミ拾いから始まって、人生につながっているんだということに気付いた。人の交流もそうだし。井荻の生徒は、将来ゴミを道にポイ捨てするような子には、100パーセントまではいかないけど、ならないと思う。経験通して少ないと思う。 ・経験から学ぶというのは今すごく貴重な時代。経験のなさは田舎であろうが都会であろうが変わらない。川にまつわる人間関係も楽しいし好きだけど、川の活動や川自体から学ぶことが本当に多いので、面白いなと感じる。 ・ここは私のふるさと。大人になってもそれは変わらないし、みんなにふるさとがあるように。自分たちが関わった活動が、まだこういう繋がりを持っているんだというのは将来も楽しいのでは。	N氏
7	・川のことが目的なのではなく、善福寺川のためだけに行っているわけではない。 ・諦めない仲間がたくさんにいるというのが、私の生きている目的、こんなに馬鹿みたいに熱い人が少なくとも日本にこれくらいいるというのが希望。この諦めず、ダメかもしれないけど諦めずやり続けることが大事であるということを伝えたい。	賀川氏
8	・川は他の自然と違い水の生き物がいて、鳥がきて、生き物がいるから子供たちが集まってという風に連鎖していくところ。川はすごいと思うから活動をしている。	吉村氏
9	・川は楽しいよ、楽しいでしょう、川は！楽しさを子供たちに教えたい。未来の子供たちに教えたい、そのためにはいい川にしないと！	境原氏
10	・もともと川が好きだったが、最近本当に川が好きかと言われるとそうでもない気もしてきた。 ・(なぜかというと)川は社会を見る一つの視点でしかない。社会というものを見る一つの見方としての川であり、社会を良くする一つのフィールドが川であるということが、この活動の僕の根本。 ・子供達と関わるようになって、改めて未来の実践者は子供達なんだということを感じた。それに子供たちが川にいる様子を見ていると、新しい都市河川のあり方というか、何も多自然にしなくてもいいのではとも思う。	中村氏
11	・くも膜下出血になり、リハビリとして歩き始めた。 ・昔自分の田舎に川があったことを思い出し、地形や川のあとがどうなっているかを調べ始めた。 ・子供の時から好きであったわけではなかったが、うちのすぐそばを流れているし、泳ぎを覚えたのは田舎の川の用水だった。そういう意味では子供のころ遊んでいたことが多分に影響されている。	H氏

５．　考察

５．１　「渋谷川ルネッサンス」と「善福寺川を里川にカエル会」の活動の特徴

「渋谷川ルネッサンス」は、目的を持った個人からの提案によって実現された活動が複数見られることが特徴的である。また、渋谷川の存在を世の中に広めるような活動が多い。これは、渋谷と都会に実は清流があったという話題になりやすい対象を活動の舞台としていることに因ると考えられる。

一方、「善福寺川を里川にカエル会」は、活動初期、既存団体が集う会や行政主催の会への参加が初期に多く見られた。その結果、他団体の杉並区民が参入し、公共事業に大きく関わるまでに至った。「善福蛙」は、活動対象河川をとりまく地域環境に活動を特徴づけられていると考えられる。

一方参加メンバーの想いとしては、「渋谷川ルネッサンス」では、それぞれが異なる目的、独自の活動を行う中で、渋谷川の再生に惹かれ、それを共通の活動目的の太い柱としている。これに対して、「善福寺川を里川にカエル会」はメンバーそれぞれのバックグラウンドは異なるが、活動をしていく中で思いを共有してきた。また、両者に共通する想いとして、川をどうにかすることだけが目的ではなく、川を媒体にして、過去に人間が行ってきたことや、現代社会に対しての問題提起がされていた。

５．２　全体のまとめ

市民団体の活動内容は、対象とする河川の特徴、地域環境が反映している。また、個人の活動目的に違いはあるが、活動の対象河川を通して、自らを取り巻く環境を見つめなおしている点、活動してゆく中で想いを共有し、市民活動としても、個人としても成長している点が両者に見られた。

＜参考文献＞

1)国土交通省水管理・国土保全河川環境課、雑誌『河川』2016年7月号、「川を軸として地域の賑わいを創る『かわまちづくり』」国土交通省水管理・国土保全河川環境課

2)島谷幸宏「変化する川　自然な川が美しい：真の清流は、地域の文化や風景があってこそ」『水の文化　特集：触発の波及』ミツカン水の文化センター　2007年10月　27号　p.31

3)TBS『日立世界ふしぎ発見』、2013年4月27日放送

4)樋口明彦、佐藤直之、高尾忠志：まちの活性化を促す都市河川整備のあり方に関する研究　土木計画学研究・論文集 Vol.22 No.2 2005

5)佐藤裕美子、熊谷洋一：鶴見川流域の地域環境保全における市民団体活動及びネットワーキング組織に関する研究、ランドスケープ研究　66(5)　2003

6)公益財団法人日本河川協会HP

7)2016年9月30日、電話によるヒアリング

8)東京都建設局、「渋谷川・古川の流域」、http://www.kensetsu.metro.tokyo.jp/jigyo/river/kamkyo/ryuiki/08/sh2/sh2-1.html、2017年1月15日アクセス

9) 打ち水大作戦本部、「打ち水大作戦〈公式ガイドブック〉」、2014年

10) 東京都建設局「妙正寺川・善福寺川　河川激甚災害対策特別緊急事業」http://www.kensetsu.metro.tokyo.jp/jigyo/river/information/gekitoku/gekitoku.html、2017年1月15日アクセス

11)国土交通省国土地理院より